

# 高度経済成長期を契機とした 植生景観の変化について

A Study of the Vegetation Changes  
Triggered by the High Economic Growth Period

小椋純一

OGURA Jun'ichi

はじめに

①岡山県北部の中国山地(津山市阿波付近)の場合

②京都市北部郊外(左京区岩倉付近)の場合

③伊勢湾口の離島(神島)の場合

④総括

おわりに

## [論文要旨]

高度経済成長期を契機とする植生景観変化とその背景について、岡山県北部の中国山地(津山市阿波)、京都市北部郊外(左京区岩倉付近)、伊勢湾口の離島(神島)の3つの地域を例に、写真や文献類、また古老への聞き取りなどをもとに考察した。

その結果、岡山県北部の中国山地では、高度経済成長期の頃までは、牛の放牧などのために広い草山が見られるところが何箇所もあったが、高度経済成長期を契機にして、草山は急速になくなっていった。一方、スギやヒノキを中心とした人工林は、高度経済成長期の頃を中心に急増した。また、人工林などに変わることなく残った薪炭林では、その利用がなくなり、近年では樹木の大樹化が進んでいるところが多い。

また、京都市北部郊外の里山では、かつてはアカマツ林が広く見られたが、高度経済成長期の頃を境に、林が放置化されて植生の遷移が進み、近年ではマツ枯れによりアカマツ林は大幅に減少してきている。その一方で、シイやカシなどの常緑広葉樹林の割合が増えてきている。また、高度経済成長期の頃までは、さかんに森林が利用されたことにより、さまざまな林齢や樹高の森林が見られたが、近年は森林の樹高などの変化があまりなくなっている。

また、伊勢湾口の神島でも、かつてはその山の植生はマツが主体であったが、高度経済成長期の途中から、京都市北部郊外の里山と同様に、マツ林は大幅に減少し、その一方で、近年ではヤブニッケイやカクレミノなどの常緑広葉樹主体の森林が増えてきている。一方、かつては山の南向き斜面を中心に広く見られた段々畑は放置されるところが増え、森林化しつつあるところが多い。

このように、高度経済成長期以降の植生景観変化は、地域によりさまざまであるが、いずれの地域でも高度経済成長期の頃の人々のくらしの激変や国の政策などが原因となり、人々の植生への関わり方も大きく変化し、それによって大きな植生景観の変化が生じた。

【キーワード】 植生景観変化、高度経済成長期、岡山県北部、京都市北部、神島